

3. 飛脚…書簡や金銀その他小貨物を送り届けるもの。次の3種がある。[P. 207①]

* 継飛脚…幕府公用の飛脚。

* 大名飛脚…幕府にならって大名が江戸と国元間に置いた飛脚。

☆16 _____…民間経営の飛脚。3度大坂を発する「三度飛脚」、東海道を6日で走る「定飛脚」(「定六」)なども登場。その業務を行うのが「飛脚問屋」。

水上交通 [図表P. 184]

1. 江戸-大坂航路(=「17 _____」)

☆17世紀前半 18 _____ 就航-江戸十組問屋と提携。[P. 208L. 3~]

↓
☆18世紀前半 酒荷専門の19 _____ が就航、競争激化。

(参考)他に尾張商人が主に営んだ瀬戸内海~江戸を結ぶ内海船があった。

2. 北陸・東北-江戸・大坂航路

☆17世紀後半、江戸の商人20 _____ が整備。幕領である出羽の米を定期的に江戸・大坂に運搬することを目的とした。

①東廻り海運(航路)…津軽海峡経由で江戸に至る。

②西廻り海運(航路)…下関経由で大坂・江戸に至る。

※特に、蝦夷地との間を往復する船を21 _____ とよぶ。

(参考)前述の内海船と北前船は積み荷を買い付け売却する買積船。運賃だけを取る船は賃積船という。

海運が整備されるまで、日本海側の物資は越前国の敦賀や若狭国・小浜に荷揚げされて、そこから陸路または琵琶湖の水運を利用して京都に集められ、そこから桂川、淀川を経由して畿内へ運ばれた。そのため、集散地としての京都は商業都市としての性格を強く持っていた。海運が整備されたのちは、物資は大坂に集中するようになり、大坂は日本最大の年貢米集散地=最大の商業都市となった。これとともに京都は絹織物などを中心とする伝統的手工業都市へと性格を変えていった。

3. 河川交通

17世紀初頭 京都の豪商で朱印船貿易家の22 _____ が保津川(大堰川)、高瀬川、富士川を開削。舟運の発達に貢献した。

図表P184の日本地図で大坂と江戸を結ぶ「_____」の航路をみつけたらそれが17。そしてその右に二つの廻船の復元模型とともに表12にある説明文が18と19を判断。18と19は競争をくりひけるが、最終的に勝利するのはどっちか、を抑えよう。

まず、江戸時代には20の人物が新たな航路を開拓するまで、日本海の米をどうやって京都・大坂に運んでいたかを確認しよう。→図表P184の表の下には青い四角。「日本海海運の発達」をこの四角に読む。実際に地図中から敦賀や小浜と江戸を結ぶこと。

↓
次に教科書P.208 L.3~L.13を読んで20.21を埋めてみよう。そして新潟あたりを出発した船が「西廻り」とどこかルートで「東廻り」とどこかルートをとるのか、地図で確かめてみよう。

教科書P207 L.10~P.208 L.2を読む。22の人物は図表P169の⑤にも、その名前が見えたり気づきませんか。

詳しく書いてあるよ